国語問題

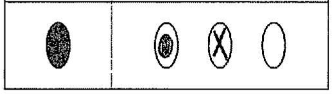
はじめに、これを読むこと。

（注意事項）

1. この問題用紙は三五ページまである。
2. 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか、受験票と照合し確認すること。
3. 解答用紙の所定の欄に氏名を記入すること。
4. 解答は、すべて解答用紙の所定の欄にマークするか、または所定の欄に楷書で記述すること。（解答用紙は表裏両面にある）
5. 解答は、必ず鉛筆またはシャープペンシル（いずれもＨＢ・黒）で記入すること。
6. 訂正は、消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
7. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。また所定以外のところには、絶対に記入しないこと。
8. 問題に指定された数より多くマークしないこと。
9. **解答用紙は、持ち帰らないこと。**
10. この問題用紙は、必ず持ち帰ること。
11. この試験時間は、六〇分である。

（マークの記入例）

良い例	悪い例



一　次の文章を読み、後の問に答えなさい。

こどもは大抵の場合、詩人である。

しかしこどもは大抵の場合、詩の読者ではない。他人の詩などにまったく関心をもたずに成長してゆくことにこそ、こどものヴァイタリティがあるのではなかろうか……とわたしは考えるのだ。

こうした問題はとくにこどもの世界だけのものではなく、現代詩の現在直面しているもっともおおきな宿題でもある。(グーテンベルグが印刷機械を発明したため詩人はみなサルグツワをかまされてしまった。といったのはビートニックでカリフォルニア派に属する詩人ローレンス・ファリンゲッティ*だが……たしかに文字表記によっておとなたちの世界における詩の認識はあらためられねばならなかった。)

明治初期の言文一致運動が、ようやく成果をおさめはじめ、文語体の詩が次第にかげをうすくしていったことと、日本における「詩」の、最初の破産期がやってきたこととは同時の問題になった。純粋な書きことば、というものがなくなって、「話し言葉」で詩を書かねばならなくなったとき……詩は書くものではなく、「話す」ものであり、表現するものであり、実践するものである……というような転身を迫られた。にもかかわらず、詩人がもう一つの「書く」ということの自律的な意味にのみ拘泥したことが詩を衰退させた。とするのがわたしの詩に対する考えかたである。

そこで、言文一致運動以来、詩は非常にプリミティヴなかたちに還元され、「文字」という代用品ではなしに「声」という直截な武器を使うべきである……ということから、朗読という詩のコミュニケーションの方法がもちいられるようになるのは当然のことだったのだと思われる。

しかし、自由詩の運動はそのような進みかたをしなかった。昭和十年代におけるモダニズム、とりわけ①「詩と詩論」の運動は、この、言葉の代用品である言語にイメージを仮託することによって日本語の構造の深部に入りこもうとしたため、言葉本来のヴァイタリティを病ませてしまうことになったのだといってもよい。現在、おおくの現代詩が言葉の形骸であり代用品であるにすぎない活字の上に病んでいるのは、そうした②近代主義との闘いにおける無残な転向の結果をしかさらしていないという理由によるものである。

ところで、こどもにこうした、衰弱した芸術である「書く詩」をおしえることはどんな意味があるのだろうか。

書く、ということは「記録」しておいて、自己を形成していくための足がかりにするか……(つまり自分をもう一つの自分の目で確認するという意味で)、あるいは「伝達」するか……の二つしか意味はない。前者において、詩がもっている意味は、文学的な意味とはまったくべつの問題であり……しかも、わたしにはそれほど大きな可能性をはらんでいるとは思えないのである。

わたしは、③もし、「詩」がそのような一つの意図によって、こどものなかに入りこんでゆくためには、「詩を書くことによって、いままで見えなかったものが見えてくる。」ということでなかったら意味がない、と考える。

しかし、こどもにとっておおくの場合、書くということは行為の軌跡をしるすことにすぎないし、思考の結果を記録することにほかならない。

――詩をかいていて僕は感じた

漢字はだまっている
カタカナはだまっていない
カタカナは幼く明るく叫びをあげる
アカサタナハマヤラワ

漢字はだまっている
ひらがなはだまっていない
ひらがなはしとやかに囁きかける
いろはにほへとちりぬるを

——そこで僕は詩作をあきらめ
大論文を書こうと思う
「字ニ於ケル世代之問題」
「ジニオケルセダイノモンダイ」
「じにおけるせだいのもんだい」

この微笑ましい詩は谷川俊太郎の「二十億光年の孤独」に収められた「世代」という詩である。ここにはたしかに、書くことによって見えなかったことが見えはじめた……という独創はあるが、④<u>しかしそれはやっぱり「文字」の問題なのだ</u>。

わたしたちがこども時代に、書くことによって文字のなかに見たものがどれだけゆたかであったか、といえば、……それははじめての遠足で見たもの……海賊ごっこで見たものの百分の一でもなかったのは勿論である。

ハックルベリイ・フィンは詩人であった。彼はその少年時代を、詩を体験することによってつねに生き生きとしていたのである。

⑤「詩」というものは、「ある」ものではなく「なる」ものであるから、彼のように一本の木や一羽の小鳥にも、冒険的な「意味」を見出すことのできる感受性は、まさに詩人のそれであることを証している。

しかし、ハックルベリイ・フィンがそうしたおどろきや発見を詩に書いたとしたら、それは「児童詩」として一体、すぐれたものでありえただろうか。

また、それを彼の親愛なる仲間であるトム・ソーヤーは、彼の度胸や、法螺に感心するように感心して読んだだろうか。

——わたしはそうしたことについてははなはだしく悲観的にならざるをえない。言葉をきわめていうならば、ハックは文字で詩を書かなかったから詩人だったのであり、こどもたちの間では勝利者、強者、独創者だけが詩人であることの権利を確保しているといえるのだ。

ところがおとなの場合、「詩」を書こうと思い立つ動機のおおくは挫折感であり、鬱屈した内部世界の欲望であり、 A であるということができる。

そして、まさにそうした対比をはぶいて児童詩を語ることはできない。おとなの「詩」的感興をもってこどもに詩をすすめることは不適当なのだから。

ここに一篇の詩がある。

大森小学校五年の折笠裕二という人の書いた「ガソリン」という詩である。

ガソリンが水たまりに
ういている
水の上なのに
美しく光っている
赤、青、黄
色とりどりだ
　おかあさんのきもののがらのよう
　こんながらのきものをきて
　千葉へ行ったことを思いだした

ところでこの詩はいったい、誰のために書かれたのか。つまり、この詩はいったい、誰が読むのか、ということは興味ふかい問題である。

この回顧的抒情は、わたしにとって未知である折笠裕二という人のドラマを感じさせる。はじめの六行と、あとの三行との間のデベイズマン*は、一人の少年の理由のない不幸を想像させるし……かなり技巧的でさえある。しかしいったい誰がこの「児童詩」をよむか……と自問してみるとき、わたしは全く答が想像できない。

結局、誰も読みはしないのではなかろうか……と思うからである。

せんせい
うらしまたろうは
「さようなら」というとき
みみや　くちに
みずが　はいると　おもいます

というおおはら・きよあきという人の詩は大変新鮮で、わたしもまた「やられたなあ」と思うわけだが、この詩にやられたなあ、と思うのは、おおかれ少なかれ「言葉屋」であり「文字使い」である職業の人でしかない。

普通のこどもは平気でそういう発想をし得るし、物語の非現実的な部分には、いつでもたいへん素朴に「疑問符」をさしはさむ。そしてそのことはこどもにとってはごく日常的なことであるからこそ、わたしは冒頭に「こどもは大抵の場合、詩人である」と書いたのである。

*ジロウドウの戯曲「間奏曲」では「木の言葉ではキツツキはお医者さんで、木樵は人殺しだ。」

という一つのハンシン[a]論が主題になっているわけだが、こうした宇宙観は本来的にはこどものものであり、こどもは非合理、非現実的なことに容赦なく疑問符をさしはさむ反面、たちまち自分が名付親になることによって一つの自然の支配者になったような気がするものなのだ。

しかし、……こどもはそうしたことを「詩」として、代理現実の世界へ記述しようとは思わない。感心するのはいつもおとな

であり、「やられたなあ」と思うのも、いつもおとなであり、かれらの仲間はいたって無関心だからである。ミヌー・ドルーエ*の「木、わたしの友だち」をわたしはとても感心して読んだが、わたしにすすめられて読んだこどもはつまらない、という。

そして⑥「水におなかがある」と感じないこどもに、そのことの意味を説明することはまったく無駄だし、なにもならないことだ、とわたしは考えなおしたわけである。

わたしの「大人狩り」というドラマのなかにはこどもの詩人もまた登場する。

革命を起こしておとなをみな殺し、または後楽園球場に大量監禁したあと、こどもばかりの世の中がやってきて……こども政府はこども憲法を発布することになる。

残酷でユーモラスなこどもたちは、つぎつぎとおとなたちの作った価値を破壊してゆくが、こどもの詩人の最初の提案は「童話」と「教科書」を焼却しよう、ということになっている。

こどもの詩人は数字で詩を書いているのである。

6663　6633　633……1！

1！

というような詩を口ずさむと、とたんに木が感動して風になびくような気さえする。「意味の世界」への B として、わたしはこのこどもの詩人を冒険にみちたこどもに仕立てあげたわけだが、……こどもが好きな詩は、こうした呪文的な口ざわり、ロクロクロクサン　といったような C に尽きるのではないか……と思うことがある。

わたしがこどもの頃好きだったのは、カッコいい節まわしの言葉のならんだ詩であり、そこに横たわっている意味の川を渉ることではなかった。

児童詩について私は、ごく断片的に書いてみたが、結論的にいえば、「 X 」のではなく「 Y 」こどもの詩人であることの意味がたしかめられる、と要約してもよいと思う。

それはおとなの詩への動機とはまったく逆の人生への好奇心のさきがけであり、「詩」の表現と伝達の問題を越えた、もっとわがままな行動欲の成果である。「芸術」の問題として論ずることはまさに無意味であるとともに、「詩」以上に詩的な少年時代を教えるためにのみ指導の意味が見出されるのだといっていいだろう。おとながそれに「やられたなあ」と<u>タンセイ</u>[b]をあげるのは、おとなの感受性の衰弱を意味することでしかない。

そしてこどもは児童詩などを読むべきではなく木を読み、日を読み、太陽を読むべきである。

それはまさしく児童詩を越えている。

Z は見事な一冊の詩集であるということを、だれよりもこどもはひそかに知っているはずなのだ。

（寺山修司「海賊詩人と子供たち」による）

（注）　ローレンス・ファリンゲッティ……一九五〇年代後半にアメリカ西海岸を中心に台頭した厭世的な「ビートジェネレーション」を代表する詩人。

デペイズマン……正確には「デペイズマン」。素材の思いがけない組み合わせによって生じる違和感を意図したシュルレアリスムの表現技法。

ジロウドウ……一八八二年生まれのフランスの劇作家。第一次世界大戦後から第二次世界大戦中に死去するまで、劇作家として活躍した。

「木、わたしの友だち」……一九五五年に当時八歳だったミヌー・ドルーエが出版した詩集。天才少女の創作としてフランス中の注目の的となった。

問一　傍線a、bのカタカナを漢字で書きなさい。

問二　傍線①「詩と詩論」に参加した詩人を次の中からひとり選びなさい。

1　萩原朔太郎　2　中原中也　3　宮沢賢治　4　西脇順三郎　5　佐藤春夫

問三　傍線②「近代主義との闘いにおける無残な転向」とあるが、これはどういうことか。その説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

1　日本の詩は明治期の言文一致運動と真摯に取り組むべきであったのに、詩人たちがそれを怠ったために、詩が現在まったく読まれなくなってしまったこと。

2　日本に古来から伝わる文語詩の伝統を詩人たちがどこまでも守るべきであったのに、明治期の言文一致運動によって日本の詩が西洋化されてしまったということ。

3　明治に入ってからの日本語の近代化によって、日本の詩の形式も定型詩から自由詩へと近代化されるべきであったのに、詩人たちが旧来の文語詩にこだわり続けたこと。

4　日本の伝統でもある「書き言葉」による詩作にどこまでも詩人たちがこだわるべきであったのに、明治期の近代化の中で詩が単なる朗読の素材になっていったこと。

5　近代に入ってからの文語体の衰退によって、詩は「書くこと」から自由になるべきであったのに、結局詩人たちが「書き言葉」に囚われてしまったということ。

問四　傍線③「もし、「詩」がそのような一つの意図によって、こどものなかに入りこんでゆくためには、「詩を書くことによって、いままで見えなかったものが見えてくる。」ということでなかったら意味がない」とあるが、こうした筆者の主張を別の表現で端的に述べた箇所はどこか。本文中から三十三文字の部分をさがして、その最初と最後の五文字を解答欄に書きなさい。ただし句読点なども字数に含むものとします。

問五　傍線④「それはやっぱり「文字」の問題なのだ」とあるが、筆者は何を言おうとしているのか。次の中からその説明としてもっとも適切なものを一つ選びなさい。

1　谷川俊太郎の詩の独創性は、文字表記の仕方によって詩全体の印象が大きく変容することを一つの作品のなかで解明した点にあるということ。

2　日本の詩の本質は西洋の詩とは違って、その内容がもたらす詩情にあるのではなく、形式的な文字表記に帰着するということ。

3　文字のそれぞれの特性は指摘できていても、「書き言葉」を越えた次元で成り立つ言葉と「詩」の関係は視界に入っていないということ。

4　日本語が漢字、カタカナ、ひらがなという三種類の文字を駆使する特殊な言語である以上、詩作においてもこの特性を活用すべきであるということ。

5　詩作もまた一つの言語活動である以上は「文字」を使って行われるほかない、という厳然たる事実を谷川俊太郎の詩が示してくれたということ。

問六　傍線⑤「「詩」というものは、「ある」ものではなく「なる」ものである」とあるが、これはどういうことか。その説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

1　「詩」とは読者の鑑賞のために供される完成された作品ではなく、作者が世界の新たな意味を発見するプロセスの中から生まれるものである。

2　「詩」とは作者が作った時点では未完成の段階であって、読者がそれを解釈することで初めて完成した形に導かれるものである。

3　「詩」とは一気呵成に出来上がるものではなく、一語一語が慎重に選択され、語の配列が試行錯誤されながらゆっくりと生み出されるものである。

4　「詩」とは作者が人為的に創り出すものというより、もともと存在している「詩」の精髄が徐々に姿を現わしてくる過程である。

5　「詩」とは一つの作品創作だけで完結するものではなく、作品を創る度ごとに作者を持続的に成長させてゆく教育的な営為である。

問七　空欄Aに入るもっとも適切な言葉を次の中から一つ選びなさい。

1　警世家の忠告　　2　敗北者の抒情　　3　勝利者の陶酔　　4　貧困層の告発　　5　有閑階級の手遊び

問八　傍線⑥「「水におなかがある」と感じないこどもに、そのことの意味を説明することはまったく無駄だし、なにもならないことだ、とわたしは考えなおしたわけである」とあるが、「水におなかがある」という表現は、本文で紹介されているミヌー・ドルーエの詩集「木、わたしの友だち」のなかの一篇「流れる水」の詩句を踏まえたものである。以下に示した詩「流れる水」を読んだうえで、なぜ筆者は傍線⑥のように考えたのか、その理由の説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

流れる水

わたしはじっとしてない水が好き
　いつまでもひとつのフレーズをおわらない水
　ぜったいにおなじお腹(なか)をもってない水
　それから同じ声をね
いつかわたしは　その水のスカートにくるまって
　消えてなくなるの、
　殻のなかにはいる
　　ひよこみたいに
それから　ちっちゃな秋の木の葉になるわ
　お日さんのいろした葉っぱ

血のいろ
もういなくなったもののいろをした、
その葉っぱはかるくなって　お利口になるわ、
わたしのこいびとの
海と風さんが
《他所(よそ)》という名のところへ
わたしを連れてってしまってくれるように。

1　日本と西洋では文化的・風土的な断絶があり、同じこどもであっても感じ方や表現にずれが生じるのは仕方がないことだから。

2　こどもの詩は、大人の詩のように意味の共有を目指すものではなく、ひとりひとり違う世界の感じ方や受け取り方が現れたものだから。

3　ミヌー・ドルーエの文学的センスや技法が群を抜いており、普通のこどもに彼女の詩作テクニックを説明するには高度すぎるから。

4　水に「お腹」がある、と感じる感性はミヌー・ドルーエや筆者の寺山修司など限られた詩人だけが有する天性の素質だから。

5　ミヌー・ドルーエの詩が大人の読者を想定して書かれたものであり、大人である筆者はともかく、こどもには理解が到底及ばないから。

問九　空欄B、Cに入る語の組み合わせとしてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

1　B―アレゴリー　C―ナンセンス
2　B―シンパシー　C―ファンタジー
3　B―アナロジー　C―カリカチュア
4　B―リスペクト　C―オノマトペ
5　B―クリティック　C―ラビリンス

問十　空欄X、Yに入る言葉の組み合わせとしてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

1　X―多くの作品に触れることで完成した大人に近づく
　　Y―大人になってもこどもの心を忘れないことによって
2　X―他人が創り出した作品を読む
　　Y―自分自身の作品を生み出すことによって
3　X―書くことによって自己形成してゆく
　　Y―書くために体験することによって
4　X―他人の作品を模倣する
　　Y―自分の心情を誰にもわかりやすく表現することによって
5　X―読むことで知識を蓄える
　　Y―書くことで自己を磨いてゆくことによって

問十一　空欄Ｚに入る語を本文中からさがして、解答欄に書きなさい。

二　次の文章を読み、後の問に答えなさい。

その頃流沙河（りゅうさが）の河底に栖（す）んでおった妖怪（ばけもの）の総数およそ一万三千、中で、渠（かれ）ばかり心弱きは無かった。渠に言わせると、自分は今までに九人の僧侶を啖（く）った罰で、それら九人の髑髏（しゃれこうべ）が自分の頸（くび）の周囲（まわり）について離れないのだそうだが、他の妖怪らには誰にもそんな髑髏は見えなかった。「見えない。それは儞（おまえ）の気の迷だ」と言うと、渠は信じがたげな眼で、一同を見返し、さて、それから、何故自分はこうみんなと違うんだろうといった風な悲しげな表情に沈むのである。他の妖怪らは互いに言合うた。「渠（あいつ）は、僧侶どころか、ろくに人間さえ咋（く）ったことは無いだろう。誰もそれを見た者が無いのだから。鮒やざこを取って喰っているのなら見たこともあるが」と。また彼らは渠に綽名（あだな）して、独言悟浄と呼んだ。渠が常に、自己に不安を感じ、身を切刻む後悔に<u>苛</u>[a]まれ、心の中で反芻されるその哀しい自己<u>呵責</u>[b]が、つい独り言となって洩れるが故である。遠方から見ると小さな泡が渠の口から出ているに過ぎないような時でも、実は彼が微かな声で呟いているのである。「　A　」とか、「　B　」とか、「　C　」とか、時として「　D　」とか。

当時は、妖怪に限らず、あらゆる生（いき）ものは凡て何かの生れかわりと信じられておった。悟浄がかつて天上界で*霊霄殿（れいしょうでん）の捲簾（けんれん）大将を勤めておったとは、この河底で誰言わぬ者も無い。それ故すこぶる懐疑的な悟浄自身も、竟（つい）にはそれを信じておるふりをせねばならなんだ。が、実をいえば、凡ての妖怪の中で渠一人はひそかに、①<u>生れかわりの説に疑をもっておった</u>。天上界で五百年前に捲簾大将をしておった者が今の俺になったのだとして、さて、その昔の捲簾大将と今のこの俺とが同じものだといっていいのだろうか？　第一、俺は昔の天上界のことを何一つ記憶してはおらぬ。その記憶以前の捲簾大将と俺と、何処が同じなのだ。身体が同じなのだろうか？　それとも魂が、だろうか？　ところで、一体、魂とは何だ？　こうした疑問を渠が洩らすと、妖怪どもは「また、始まった」といって嗤（わら）うのである。あるものは嘲弄するように、あるものは憐愍（れんびん）の面持を以て「病

気なんだよ。悪い病気の所為なんだよ」と言うた。

② 事実、渠は病気だった。

何時の頃から、また、何が因でこんな病気になったか、悟浄はそのどちらをも知らぬ。ただ、気が付いたらその時はもう、このような厭わしいものが、周囲に重々しく立罩めておった。渠は何をするのもいやになり、見るもの聞くものが凡て渠の気を沈ませ、何事につけても自分が厭わしく、自分に信用がおけぬようになってしもうた。何日も何日も洞穴に籠って、食も摂らず、ギョロリと眼ばかり光らせて、渠は物思いに沈んだ。不意に立上ってその辺を歩き廻り、何かブツブツ独り言をいいまた突然坐る。その動作の一つ一つを自分では意識しておらぬのである。どんな点がはっきりすれば、自分の不安が去るのか。それさえ渠には解らなんだ。ただ、今まで当然として受取ってきた凡てが、不可解な疑わしいものに見えて来た。今まで纏まった一つの事と思われたものが、バラバラに分解された姿で受取られ、その一つの部分部分について考えている中に、全体の意味が解らなくなって来るといった風だった。

医者でもあり・占星師でもあり・祈禱者でもある・一人の老いたる魚怪が、或時悟浄を見てこう言うた。「やれ、いたわしや。因果な病にかかったものじゃ。この病にかかったが最後、百人の中九十九人までは惨めな一生を送らねばなりませぬぞ。元来、我々の中には無かった病気じゃが、我々が人間を咋うようになってから、我々の間にも極く稀に、これに侵される者が出て来たのじゃ。この病に侵された者はな、凡ての物事を素直に受取ることが出来ぬ。何を見ても、何に出会うても『何故？』とすぐに考える。究極の・正真正銘の・神様だけが御存じの『何故？』を考えようとするのじゃ。そんな事を思うては生物は生きて行けぬものじゃ。そんな事は考えぬというのが、この世の生物の間の約束ではないか。殊に始末に困るのは、この病人が『自分』というものに疑をもつことじゃ。何故俺は俺を俺と思うのか？　他の者を俺と思うても差支えなかろうに。俺とは一体

何だ？　こう考え始めるのが、この病の一番悪い徴候じゃ。どうじゃ。当りましたろうがの。お気の毒じゃが、この病には、薬もなければ、医者もない。自分で治すよりほかは無いのじゃ。よほどの機縁に恵まれぬ限り、まず、あんたの顔色のはれる時はありますまいて。」

文字の発明は疾くに人間世界から伝わって、彼らの世界にも知られておったが、総じて③<u>彼らの間には文字を軽蔑する習慣があった</u>。生きておる智慧が、そんな文字などという死物で書留められる訳がない。（絵になら、まだしも画けようが。）それは、煙をその形のままに手で執らえようとするにも似た愚かさであると、一般に信じられておった。従って、文字を解することは、かえって生命力衰退の徴候として斥けられた。悟浄が日頃憂鬱なのも、［ X ］、渠が文字を解するために違いないと、妖怪どもの間では思われておった。

文字は尚ばれなかったが、しかし、④<u>思想</u>が軽んじられておった訳ではない。一万三千の怪物の中には哲学者も少くはなかった。ただ、彼らの語彙は甚だ貧弱だったので、最もむずかしい大問題が、最も無邪気な言葉で以て考えられておった。彼らは流砂河の河底にそれぞれ考える店を張り、ために、この河底には一脈の哲学的憂鬱が漂うていたほどである。或る賢明な老魚は、美しい庭を買い、明るい窓の下で、永遠の悔なき幸福について冥想しておった。或る高貴な魚族は、美しい縞のある鮮緑の藻の蔭で、竪琴をかき鳴らしながら、宇宙の音楽的調和を讃えておった。醜く・鈍く・馬鹿正直な・それでいて、自分の愚かな苦悩を隠そうともしない⑤<u>悟浄は、こうした知的な妖怪どもの間で</u>、いい嬲りものになった。一人の聡明そうな怪物が、悟浄に向い、真面目くさって言うた。「真理とは何ぞや？」そして渠の返辞をも待たず、嘲笑を口辺に浮かべて大股に歩み去った。また、一人の妖怪――これは鮐魚の精だったが――は、悟浄の病を聞いて、わざわざ訪ねて来た。悟浄の病因が「死への恐怖」にあると察して、これを哂おうがためにやって来たのである。「生ある間は死なし。死到れば、既に我なし。また、何を

か懼れん。」というのがこの男の論法であった。悟浄はこの議論の正しさを素直に認めた。というのは、渠自身決して死を怖れていたのではなかったし、渠の病因も其処には無かったのだから。哂おうとしてやって来た鮎魚の精は失望して帰って行った。

妖怪の世界にあっては、身体と心とが、人間の世界におけるほどはっきりと分れてはいなかったので、心の病は直ちに烈しい肉体の苦しみとなって悟浄を責めた。堪えがたくなった渠は、ついに意を決した。「この上は、如何に骨が折れようと、また、如何に行く先々で愚弄され哂われようと、とにかく一応、この河の底に栖むあらゆる賢人、あらゆる医者、あらゆる占星師に親しく会って、自分に納得の行くまで、教を乞おう」と。

渠は粗末な*直綴を纏うて、出発した。

⑥<u>何故、妖怪は妖怪であって、人間でないか？</u>　彼らは、自己の属性の一つだけを、極度に、他との均衡を絶して、醜いまでに、非人間的なまでに、発達させた不具者だからである。或るものは極度に貪食で、従って口と腹がむやみに大きく、或るものは極度に淫蕩で、従ってそれに使用される器官が著しく発達し、或るものは極度に純潔で、従って頭部を除く凡ての部分がすっかり退化しきっていた。彼らはいずれも自己の性向、世界観に絶対に［ Y ］していて、他との討論の結果、より高い結論に達するなどという事を知らなかった。他人の考の筋道を辿るには余りに自己の特徴が著しく伸張し過ぎていたからである。それ故、流砂河の水底では、何百かの世界観や形而上学が、決して他と融和することなく、或るものは穏かな絶望の歓喜を以て、或るものは底抜けの明るさを以て、或るものは願望はあれど希望なき溜息を以て、揺動く無数の藻草のようにゆらゆらとたゆとうておった。

（中島敦「悟浄出世」による）

（注）霊霄殿の捲簾大将……天上界の最高神である玉皇大帝（玉帝）の御殿で車のすだれを上下して警護する役。
直綴……僧衣の一種。

問一　傍線a、bの漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

問二　空欄A〜Dには悟浄の言葉として以下に挙げるもののどれかが入る。そのうち一つは該当しないが、それはどれか、次の中から一つ選びなさい。

1　もう駄目だ、俺は
2　俺は莫迦だ
3　どうして俺はこうなんだろう
4　誰も俺を解って呉れない
5　俺は堕天使だ

問三　空欄X、Yに入る表現として適当なものを次の中から一つずつ選びなさい。

X　1　蓋然　2　畢竟　3　究極　4　仮令　5　絶対

Y　1　抵抗　2　依存　3　固執　4　隷属　5　密着

問四　傍線①「生れかわりの説に疑をもっておった」とあるが、それはなぜか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

1　前世の自分と現世の自分が一致しても何も役に立たないから。
2　自分の意識の中では捲簾大将だった時の記憶が不確かだから。
3　生まれかわりの説は非科学的で実証が不可能な考え方だから。
4　死んでしまえば魂は身体とともに滅んでしまい、復活しないから。
5　生まれかわりの説とは昔から妖怪仲間に伝わる言い伝えに過ぎないから。

問五　傍線②「事実、渠は病気だった」とあるが、それは具体的にどのような状態か。もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

1　自分だけが妖怪たちから仲間はずれにされてしまい、まわりの誰をも信じることができなくなった状態
2　元の自分や仲間のような本来の妖怪のあり方から離れて、生き物としての人間にどんどん近づいている状態
3　精一杯頑張ってもどうしても自分の理想とする境地にたどり着くことができず、いらだっている状態
4　人間を食べたため、ものごとを素直に受け取るという妖怪特有の見方ができなくなってしまった状態
5　誰もが当たり前だと思っていることがらに対して根本的な疑いが芽生え、みずからの拠り所を失った状態

問六　傍線③「彼らの間には文字を軽蔑する習慣があった」とあるが、妖怪たちはなぜ文字を軽蔑したか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

1　文字を習得し使いこなすのには膨大な労力が必要であるから。
2　文字を用いても生き生きとした現実はとらえきれないから。
3　人間を真似て文字を使用すると本来の妖怪らしさを失うから。
4　文字が使えても病気の予防や治癒には役に立たないから。
5　文字を知るものとそうでないものとの間には格差が生じるから。

問七　傍線④「思想」とあるが、本文中には「思想」と同様の意味で使われている語がいくつか見られる。本文中にある次の類義語のうち、「思想」とは異なる意味で使われているものを次の中から一つ選びなさい。

1　真理　2　形而上学　3　智慧　4　世界観　5　哲学

問八　傍線⑤「悟浄は、こうした知的な妖怪どもの間で、いい嬲りものになった」とあるが、悟浄と知的な妖怪とはどのように異なるのか。その説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

1　知的な妖怪たちが妖怪の本質を様々な観点から見極めようとしているのに対して、悟浄は「人間とは何か」という問題を突き詰めようとしている。

2　知的な妖怪たちが仲間と互いに議論しあいながら思索をすすめていくのに対して、悟浄はひとり孤独に沈思黙考することで内省を深めている。

3　知的な妖怪たちが現実世界をどう生きるかという実践的な問題に取り組んでいるのに対して、悟浄は世界や自己の存在それ自体を問題にしている。

4　知的な妖怪たちが「幸福」から「宇宙」にわたる多岐多様な問題に取り組んでいるのに対して、悟浄は利己的な姿勢で自分に関わる問題だけを考えている。

5　知的な妖怪たちが厳密で論理的な方法で思考しているのに対して、悟浄は不安や恐怖といった感情にもとづいた直観的な方法で思考している。

問九　傍線⑥「何故、妖怪は妖怪であって、人間でないか？」とあるが、妖怪と人間とはどのように違うのか。その説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

1　妖怪は文字を使わないので思考力は未発達であるが、人間は文字を記録や伝達に生かすことで思考力の幅を格段に広げることができる。

2　妖怪はそのあり方が多様ではあってもそれぞれの立場は平等であるが、人間は世間的な価値観に従うので、自然と上下関係が発生してしまう。

3　妖怪はそれぞれの能力が完成してしまっているのでそれ以上は向上しないが、人間は極限まで発達したわけではなく、今後も進歩することができる。

4　妖怪はそれぞれが自分の考えに閉じこもってそれを絶対化するが、人間は他者との議論を通じて自分の意見を相対化することができる。

5　妖怪は身体の一部分を不自然なまでに強化し肥大化させたが、人間は部分的には貧弱でも全体として身体や能力のバランスが取れている。

問十　本文中の「悟浄」はある文学作品の中に登場している。その作品名を漢字で答えなさい。

三　次の文章は、『源氏物語』御法巻において、明石中宮と光源氏が紫上のもとを訪問する場面が描かれたものである。また、続く「図一」は、十二世紀に作られた『源氏物語絵巻』の一部であり、本文の内容に該当する場面である。「図二」は、「図一」の景物や人物の輪郭を抽出したものである。これらを参照し、後の問に答えなさい。

秋待ちつけて、世の中すこし涼しくなりては御心地もいささかさはやぐやうなれど、なほともすればかごとがまし。さるは身にしむばかり思さるべき秋風ならねど、露けきをりがちにて<u>過ぐしたまふ</u>[ア]。

中宮は参りたまひなんとするを、いましばしは御覧ぜよとも聞こえまほしう思せども、さかしきやうにもあり、<u>内裏</u>[a]の御使の隙（ひま）なきもわづらはしければ、さも聞こえたまはぬに、あなたにもえ渡りたまはねば、宮ぞ渡りたまひ［　A　］。①<u>かたはらいたけれど、げに見たてまつらぬもかひなしとて、こなたに御しつらひをことにせさせたまふ</u>。

こよなう痩せ細りたまへれど、かくてこそ、あてになまめかしきことの限りなさもまさりてめでたかりけれと、来し方あまりにほひ多くあざあざとおはせし盛りは、なかなかこの世の花のかをりにもよそへられたまひしを、限りもなくらうたげにをかしげなる御さまにて、いとかりそめに世を思ひたまへる気色、似るものなく心苦しく、すずろにもの悲し。

風すごく吹き出でたる夕暮に、<u>前栽</u>[b]見たまふとて、<u>脇息</u>[c]によりゐたまへるを、院渡りて見たてまつりたまひて、「今日は、いとよく起きゐたまふめるは。この御前にては、こよなく御心もはればれしげなめりかし。」と<u>聞こえたまふ</u>[イ]。かばかりの隙あるをもいとうれしと思ひきこえたまへる御気色を見たまふも心苦しく、②<u>つひにいかに思し騒がんと思ふに、あはれなれば、</u>

おくと見るほどぞはかなきともすれば風にみだるる萩のうは露

げにぞ、折れかへりとまるべうもあらぬ、よそへられたるをりさへ忍びがたきを、見出だしたまひても、

ややもせば消えをあらそふ露の世におくれ先だつほど経ずもがな

とて、御涙を払ひあへたまはず。宮、

　　秋風にしばしとまらぬつゆの世をたれか草葉のうへとのみ見ん

と聞こえかはしたまふ<u>御容貌</u>[ウ]どもあらまほしく、見るかひあるにつけても、かくて千年を過ぐすわざもがなと<u>思さるれど</u>[エ]、心にかなはぬことなれば、かけとめん方なきぞ悲しかりける。

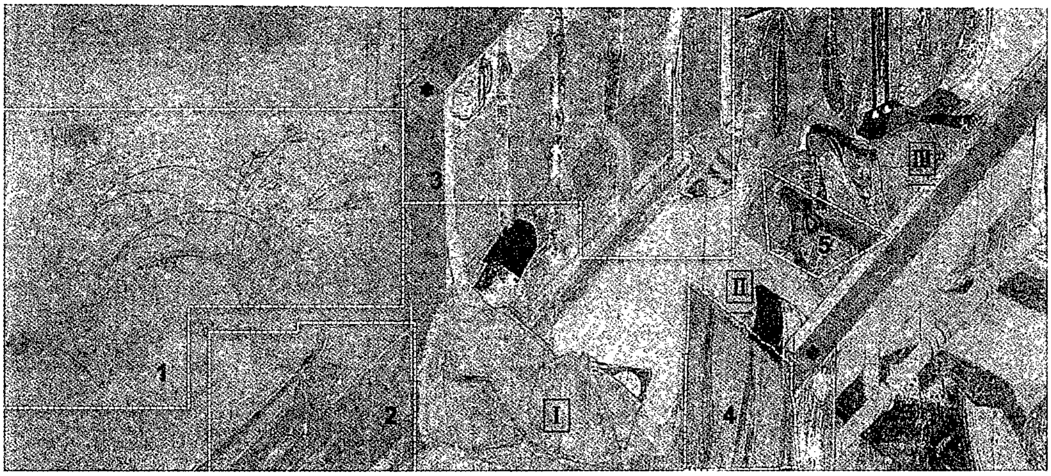
「今は渡らせ［ B ］。乱り心地いと苦しくなりはべりぬ。言ふかひなくなりにけるほどといひながら、いとなめげにはべりや」とて、<u>御几帳</u>[d]ひき寄せて臥したまへるさまの、常よりもいと頼もしげなく見えたまへば、「いかに思さるるにか」とて、宮は御手をとらへたてまつりて泣く泣く見たてまつりたまふに、まことに消えゆく［ C ］の心地して限りに見えたまへば、<u>御誦経</u>[e]の使ども数も知らずたち騒ぎたり。さきざきもかくて生き出でたまふをりにならひたまひて、御物の怪と疑ひたまひて夜一夜さまざまのことをし尽くさせたまへど、かひもなく、明けはつるほどに<u>消えはてたまひぬ</u>[オ]。

（『源氏物語』による）

（注）　中宮……明石中宮のこと。光源氏と明石君との娘で、紫上に育てられ、今上帝の中宮となった。いつもは宮中にいるが、一時的に二条院に滞在している。

　院……光源氏のこと。

図一



（五島美術館『国宝源氏物語絵巻』による）

図二

（徳川美術館『新版徳川美術館蔵品抄２　源氏物語絵巻』による）

問一　傍線ａ、ｅの漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

ａ　内裏　　ｅ　誦経

問二　空欄Ａ、Ｂに入る言葉の組み合わせとして正しいものを次の中から一つ選びなさい。

1　Ａ　けれ　　Ｂ　たまはず
2　Ａ　けり　　Ｂ　たまはぬ
3　Ａ　ける　　Ｂ　たまへぬ
4　Ａ　けり　　Ｂ　たまへ
5　Ａ　ける　　Ｂ　たまひね

問三　傍線①の解釈としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

1　紫の上は、気分がすぐれず身体中が痛み、人に会える状態では到底ないが、明石中宮にお会いしないのも不甲斐ないと、こちらのお部屋に御座所を特別にととのえさせなさる

2　明石中宮は、病み臥せっている紫の上を思うと自らの身体も痛むようであるが、それでも会わないわけにはいかないと、こちらのお部屋に御座所を特別にととのえさせなさる

3　光源氏は、紫の上の痛ましい姿を見るのは限りなくつらいことであるが、やはりお会いしたほうがよいであろうと、こちらのお部屋に御座所を特別にととのえさせなさる

4　紫の上は、自らの弱りきった姿をお見せするのはお恥ずかしいが、明石中宮にお目にかからずにはいられないと、こちらのお部屋に御座所を特別にととのえさせなさる

5　明石中宮は、紫の上が自分に会いたがっているのか確信がもてないが、それでもお目にかからぬのも不都合であると、こちらのお部屋に御座所を特別にととのえさせなさる

問四　本文の傍線b「前栽」・c「脇息」・d「几帳」が示すものを図一の1から5の中からそれぞれ選びなさい。

問五　図一に描かれる人物IからIIIの中で、本文中の傍線ア・イ・エ・オの動作主およびウの指示する人物に対応する組み合わせとして正しいものを次の中から一つ選びなさい。

1　ア―II　イ―III　ウ―I・II　エ―III　オ―I
2　ア―I　イ―III　ウ―I・III　エ―II　オ―III
3　ア―III　イ―I　ウ―II・III　エ―I　オ―III
4　ア―II　イ―I　ウ―I・III　エ―II　オ―II
5　ア―III　イ―II　ウ―I・III　エ―II　オ―III

問六　図一に描かれている本文の内容を説明した次の文章の中で適切ではないものを一つ選びなさい。

1　風がものさびしく吹き始めた夕方に、庭の草花を見ようと身を起こす紫の上に対面し、中宮がそばにいると気分が晴れるのであろうと言葉を掛け、紫の上の小康状態を喜ぶ光源氏の様子が描かれている。

2　かつては色香にあふれて華やかで、この世の花の美しさにもたとえられていたが、今では病み衰えてやせ細り、すっかりやつれて、若かりし頃の優美さが失われた憐れな紫の上の様子が描かれている。

3　萩の葉の上に置かれた露が風に吹かれて乱れ落ちるように、今は身を起こしている我が命もすぐに消え去ることだろうと詠む紫の上の歌を反映して、庭の萩が風に吹かれ、しなだれている様子が描かれている。

4　先を争って消え果てる露にも等しい命であるが、遅れ先立つ間を置かずに私たちが一緒に死ねるようでありたいと歌を詠み、袖で涙を押さえ、紫の上を失う悲しみに暮れている光源氏の様子が描かれている。

5　紫の上と光源氏との間で交わされた贈答歌に対して、秋風に吹かれてほどなく散っていく露に人間のはかない命をなぞらえ、自らの歌を添える明石中宮の様子が、二人に比して控えめに描かれている。

問七　傍線②の解釈としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

1　紫の上は、自分がいよいよ死ぬという時には、光源氏がどんなにかお嘆きになることかと思うとしみじみと悲しいお気持ちになるので

2　光源氏は、今こそ小康状態を保っている紫の上がいよいよ亡くなるという時にはどれほどつらいことだろうとお感じになるので

3　明石中宮は、紫の上がとうとうお亡くなりになる時には、光源氏がどれほどに嘆かれるか思うとうちひしがれた気持ちになるので

4　紫の上は、いよいよ自らの命が果てる時には、どれほど思い乱れることだろうと思うと実につらく耐えがたいお気持ちになるので

5　光源氏は、健気に振る舞っている紫の上が、自らの死を前にしていかに心が乱れていることだろうと悲しい気持ちになるので

問八　空欄Cに入る一語を本文中から抜き出しなさい。

問九　『源氏物語絵巻』に採用された技法およびそこに描かれた内容について説明した次の文章の中で適切ではないものを一つ選びなさい。

1　物語の展開において中心となる登場人物が相対的に大きく、丹念に描かれることで、鑑賞者は語り手の視点に寄り添い、登場人物の関係性やそれぞれの心情が絡み合う物語世界の奥行きを体験することができる。

2　建物から屋根や壁を取り払って描写する「吹抜屋台」という技法や、斜め上方から室内を俯瞰する視点が採用されていることで、鑑賞者の視線は物語世界の内部空間を自由自在に移動することができる。

3　人物の容貌や建物、室内の調度や植栽に至るまで事物を正確に描く写実的な描法によって、鑑賞者は描かれた世界を虚構というよりも、現実に存在しうる客観的な世界として把握することができる。

4　物語内で登場人物が詠んだ和歌に取りあげられる景物の様子が詳細に描かれることで、鑑賞者は景物を単なる事物としてではなく、登場人物の心情を映し出す心象風景として把握することができる。

5　絵巻の画面は水平方向に展開する形式であることから、物語の断片的な一場面が切り取られるのではなく、出来事の時間的な推移が描き出されることで、鑑賞者は物語の流れを読み解くことができる。